

令和 5 年度

知床半島先端部地区利用状況調査業務 報告書



令和 5（2023 年）12 月

公益財団法人 知床財団

報告書概要

1) 業務名

令和5年度 知床半島先端部地区利用状況調査業務

2) 業務目的

本業務は、知床国立公園の適正な利用を推進する上で必要な基礎データを収集することを目的とし、先端部地区を利用する利用者の動向を現地での聞き取り調査により把握した。

3) 業務実施体制

本業務は、環境省からの請負業務として、公益財団法人 知床財団が実施した。

4) 実施概要

(1) 入域調査

先端部地区利用者への聞き取り調査は、2023年7月20日から7月23日、8月10日から8月13日の期間で計8日間行い、計51組143名から回答を得た。調査場所は、先端部地区の入り口である相泊の入林箱付近である。聞き取り項目は、グループ人数、年齢層、利用形態、移動経路と行動予定、ヒグマ対策の状況、ルサフィールドハウスへの立ち寄りの有無、知床半島先端部地区 利用の心得とそのWebサイトである「シレココ」の認知状況である。

(2) 2020年度から2023年度に実施した入域調査結果の取りまとめ

先端部地区利用者の動向を把握するための入域調査は、2020年度から同様の形式で実施されており、2023年度までの累計で192組を対象に聞き取りを実施している。本業務ではこれらのデータを統合し、①利用形態、②ヒグマ対策の有無、③ルサフィールドハウスへの立ち寄り状況、④利用の心得及びシレココの認知状況の4点に着目した経年推移を分析した。

(3) その他

業務実施中に「利用の心得」から逸脱した不適切な利用（不十分なヒグマ対策、たき火の実施、ゴミの投棄、番屋への宿泊、釣魚の投棄等）が認められた場合には、利用者に「利用の心得」について説明を行った。

また、業務実施中に、コース上の難所の状況変化（落石や崩落等）、ヒグマ出没情報等について確認した場合は記録を行うとともに、その情報をルサFHに提供した。なお、これらの結果については、(1) 入域調査の結果と一体的に報告する体裁とした。

表紙写真:調査風景

目次

はじめに.....	1
1.2023 年度入域調査	2
1.1.調査内容.....	2
1-2.調査結果	4
2.2020 年度から 2023 年度に実施した調査結果の取りまとめ.....	16
2-1.分析の方法.....	16
2-2.分析の結果.....	17
3.まとめと考察.....	25
3-1.2020 年度から 2023 年度までの入域調査に関する考察	25
3-2.来年度の調査のあり方.....	26

資料編

巻末資料 1. 2023(令和5)年度 知床半島先端部地区 利用状況調査表

巻末資料 2. 2023(令和5)年度 知床半島先端部地区利用状況調査 入域調査の結果一覧

はじめに

知床半島先端部地区（以下「先端部地区」という。）は極めて原始性の高い自然環境と豊富な野生生物によって形成される多様な生態系が残されている地域であり、利用のための施設が設けられていないなど、一般の利用者による積極的な利用は想定されていない。一方で、知床ならではの質の高い自然体験の機会を求めて多様な利用者が訪れる場所でもあり、適正な利用と保全との両立を図ることが必要である。

環境省では、原始性の高い自然環境の保全と質の高い自然体験機会の提供を両立するため、レクリエーションを目的として先端部地区を利用する際のルール「知床半島先端部地区利用の心得」（以下、「利用の心得」という。）を定めるとともに、知床世界遺産ルサフィールドハウス（以下、ルサ FH という。）等の施設で先端部地区利用者へのレクチャーを実施している。さらに、知床半島先端部地区利用の心得 Web サイト、通称「シレココ」（以下、「シレココ」という。）を作成し普及活動に努めるなど、自然環境の保全を前提とした適切な先端部地区の利用を推進してきた。一方で近年、利用状況の変化や利用ニーズの多様化が指摘されており、実態を把握するための調査を行う必要性が高まってきている。

本業務は、知床国立公園の適正な利用の推進に必要な基礎データを収集するため、先端部地区を利用するトレkkerやカヤッカー、釣り人の動向を調査し、その結果についてまとめたものである。

1. 2023 年度入域調査

1-1. 調査内容

先端部地区の利用状況を把握することを目的とし、羅臼町相泊において聞き取り調査を実施した。調査方法は、環境省担当官と協議の上決定し、以下の要領で実施した。

調査期間は、7月20日から7月23日と8月10日から8月13日の計8日間実施した。これらの期間は大潮の時期に相当するため、多くの人々が先端部地区を利用するものと想定して選定した。調査時間は4:00から18:00までの14時間とし、調査員は4:00から11:00まで1名、11:00から18:00まで1名をシフト制でそれぞれ配置した。調査の実施場所は、林野庁が設置した入林箱周辺である（表1、図1、写真1）。

聞き取り対象は、相泊から知床岬、知床岳などを目指すトレkkerや登山者、相泊を発着するカヤッカー、相泊からカモイウンベ川、クズレハマ川などでカラフトマスやシロザケの釣りをする釣り人である。調査項目は、「グループ人数、年齢層、利用形態、移動経路と行動予定、ヒグマ対策の状況、ルサ FH への立ち寄りの有無（ルサ FH へ立ち寄りがあった場合、レクチャー受講の有無の確認。無かった場合、立ち寄らなかった理由を聞き取り。）、利用の心得及びシレココの認知状況」を基本事項として調査票を作成した。調査票は巻末資料1に収録した。

表 1. 入域調査の実施日と担当者

日付	開始時間	終了時間	天候	担当者
7月20日	4:00	11:00	曇り	茂木
	11:00	18:00	晴	宮腰
7月21日	4:00	11:00	曇り	宮腰
	11:00	18:00	晴	稲葉
7月22日	4:00	11:00	晴	宮腰
	11:00	18:00		稲葉
7月23日	4:00	11:00	晴	茂木
	11:00	18:00		坂部
8月10日	4:00	11:00	曇り	宮腰
	11:00	18:00	晴	
8月11日	4:00	11:00	晴	茂木
	11:00	18:00		宮腰
8月12日	4:00	11:00	曇り	茂木
	11:00	18:00		稲葉
8月13日	4:00	11:00	曇り	茂木
	11:00	18:00		稲葉



図 1. 入域調査の実施地点(赤点、聞き取り場所)

出典：電子地形図 25,000 (国土地理院)



写真 1. 入域調査の実施場所(赤枠で示す)

1-2. 調査結果

＜調査の実施概要＞

先端部地区を利用したトレkkerやカヤッカー、釣り人から聞き取りを行い、計 51 組 143 名から回答を得た。聞き取り結果は巻末資料 2 に収録した。

8 日間の調査期間において、310 組の利用者は聞き取りの対象外とした。これは、相泊に短時間しか滞在しない一般の観光客等が該当し、聞き取りはせずに目視によるカウントのみを実施した。

＜利用形態＞

先端部地区の利用形態を主に「トレッキング（登山者含む）」「シーカヤック」「釣り」に分類し、上記に該当する利用者への聞き取りを実施した（表 2）。

利用者は 8 月に集中する傾向があり、調査期間中、8 月 11 日の聞き取り組数が最多であった。利用形態は「釣り」の利用者が最も多かった。

表 2. 入域調査の聞き取り組数と人数（利用形態別）

トレッキング			シーカヤック		釣り		合計	
日付	組数	人数	組数	人数	組数	人数	組数	人数
7月20日	0	0	1	14	1	1	2	15
7月21日	0	0	0	0	1	1	1	1
7月22日	2	2	2	5	2	3	6	10
7月23日	1	1	0	0	0	0	1	1
8月10日	0	0	0	0	3	7	3	7
8月11日	2	9	3	29	8	14	13	52
8月12日	3	10	1	3	8	14	12	27
8月13日	2	8	0	0	11	22	13	30
合計	10	30	7	51	34	62	51	143

＜利用形態別のグループ人数（図2）＞

「トレッキング」は単独利用が約5割であった。次いで、「シーカヤック」は複数グループの割合が多く、6人以上が約4割。2～4人のグループも含めると、約7割が複数グループの利用であった。最後に「釣り」は、2～4人グループの利用が約5割という結果となった。

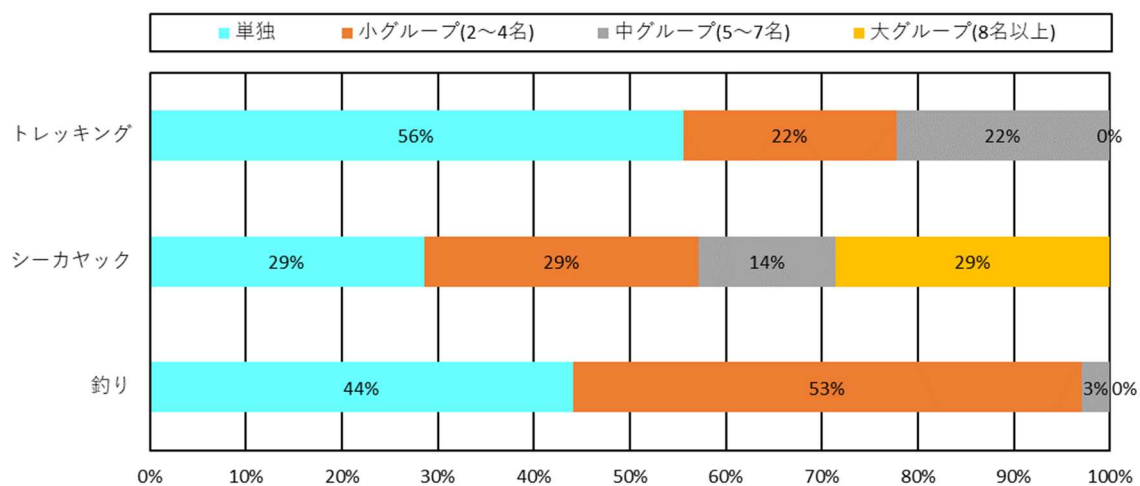


図2. 利用形態別のグループ人数

＜利用形態別 利用者数の年齢層（図 3）＞

先端部利用者の年齢層は幅広く分布していた。トレッキングは10代、40代が最も多く、60代から70代以上の利用者はいなかった。シーカヤックは50代が最も多く、次いで40代と中年層の利用が目立った。釣りは50代が最も多く、次いで60代の中年層と高年齢層の利用が目立った。

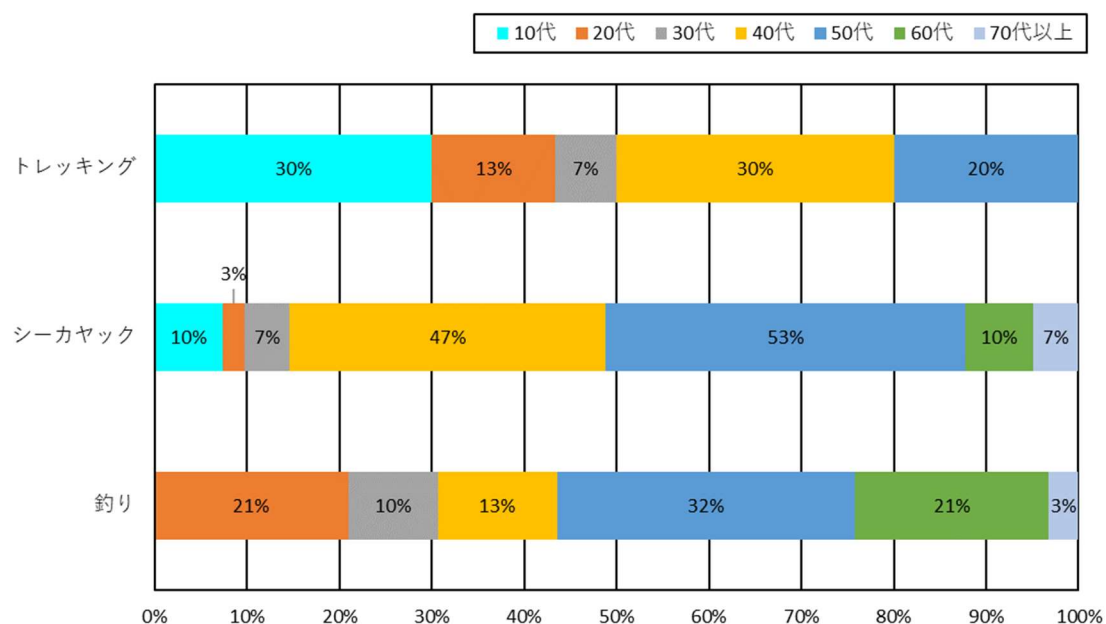


図 3. 利用形態別 利用者数の年齢層

＜利用形態別 ヒグマ対策の状況（表 3、表 4）＞

「トレッキング」、「シーカヤック」、「釣り」の利用者は、9 割以上がヒグマとの遭遇、回避をするための対策を講じていた。

表 3. 利用形態別 ヒグマ対策の状況

		あり	なし	合計
トレッキング	組	9	1	10
	%	90%	10%	100%
シーカヤック	組	7	0	7
	%	100%	0%	100%
釣り	組	32	2	34
	%	94%	6%	100%

ヒグマ対策を講じていた利用者に対してさらに携帯している道具の聞き取りを行った。「トレッキング」、「シーカヤック」、「釣り」とともに「クマスプレー」の携帯が最多であった。「その他」については、笛、爆竹、斧、火薬ピストル、棒、轟音玉、獣除け線香、ロケット花火、ナイフなどを携帯していた利用者を指す。

表 4. 利用形態別で利用者が携帯していたヒグマ対策道具（複数回答）

	クマスプレー	フードコンテナ	鈴	その他
トレッキング (n=9)	9	7	6	8
シーカヤック (n=7)	7	1	1	3
釣り (n=32)	16	0	29	13

＜利用形態別 ルサ FH への立ち寄り組数の有無（図 4）＞

全体としてルサ FH への立ち寄りは半数以下だった。立ち寄らなかった理由を利用形態別で以下に記す。

トレッキング利用者は「ルサ FH の存在を知らなかった」「開館中の時間に間に合わなかった」「今回は立ち寄らなかったが、過去にいったことがある」といった内容であった。

シーカヤック利用者は「開館中の時間に間に合わなかった」といった内容であった。

釣り利用者は「ルサ FH の存在を知らなかった」「立ち寄る理由がない」「開館中の時間に間に合わなかった」といった内容であった。

立ち寄った 8 組の利用者にルサ FH でレクチャーを受講したか確認を取り、8 組中 6 組がレクチャーを受講していた。内訳は、「トレッキング」4 組、「シーカヤック」2 組「釣り」0 組といった結果となった。

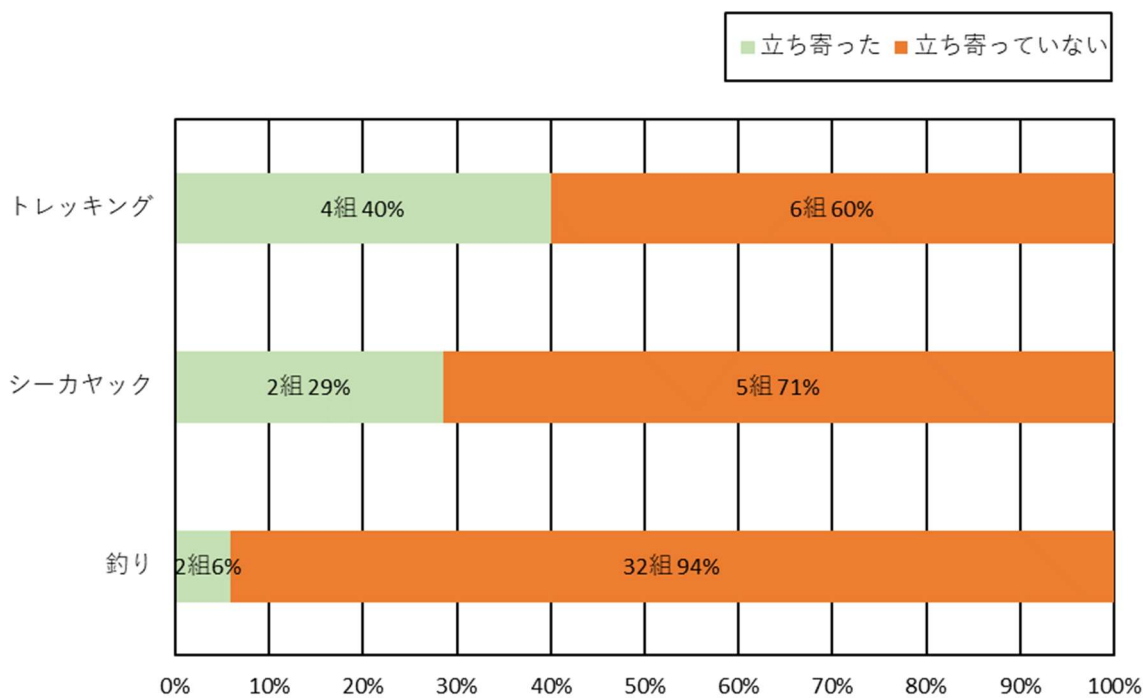


図 4. 利用形態別 ルサフィールドハウスへの立ち寄り状況

＜利用形態別 利用の心得及びシレココの認知状況の組数（図 5）＞

「シーカヤック」「トレッキング」利用者のほとんどが認知していた。情報源について詳しい聞き取りをしたところ「ルサ FH で紹介してもらった。」「インターネットで検索して知った。」などの内容であった。また、認知していない利用者については、その場で「利用の心得の冊子」と「web サイトシレココ」の紹介と説明を行った。

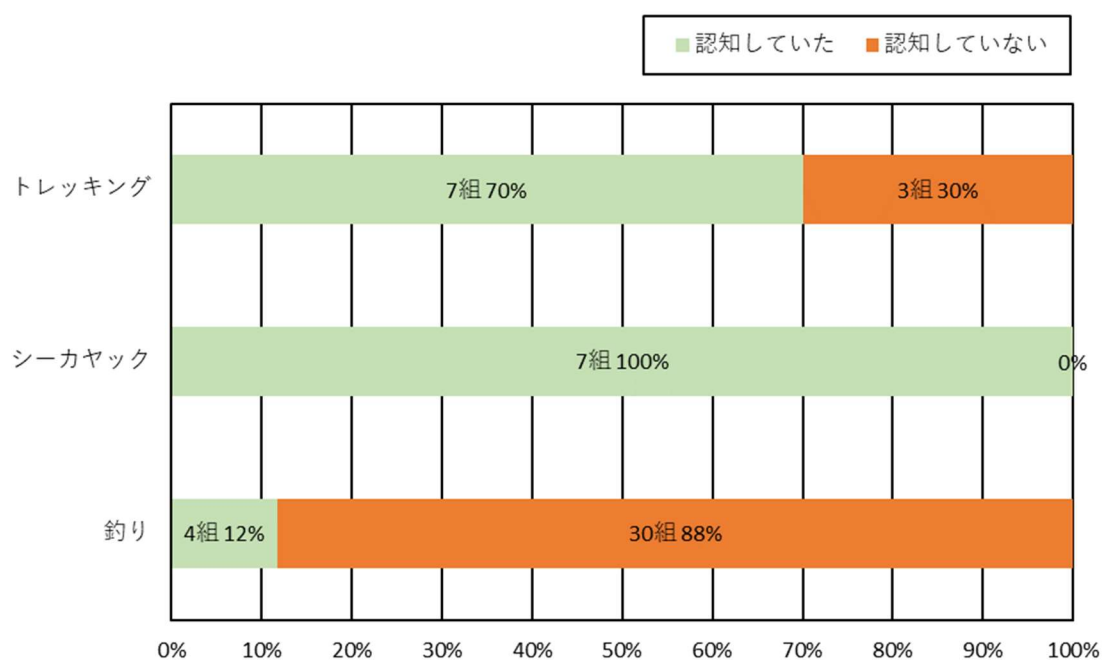


図 5. 利用の心得及びシレココの認知状況の割合

＜移動経路と宿泊地点＞

先端部利用者の移動経路と宿泊地点について、利用形態別に整理した。

① トレッキング(図6,表5)

移動経路は 4 ルートあり、相泊から知床岬の往復、相泊から知床岳の往復、相泊から知床岬と知床岳、ルサからウトロ側と羅臼側の海岸線であった。ルサから入林した利用者については、「ルシャ地区の立ち入り及び野営を行わない地域」を通過していたため、利用の心得を用いて説明を行った。行動予定については、知床沼利用が最も多く 4 組。1 組知床岬で野営予定だったため、利用の心得を用いて説明を行った。

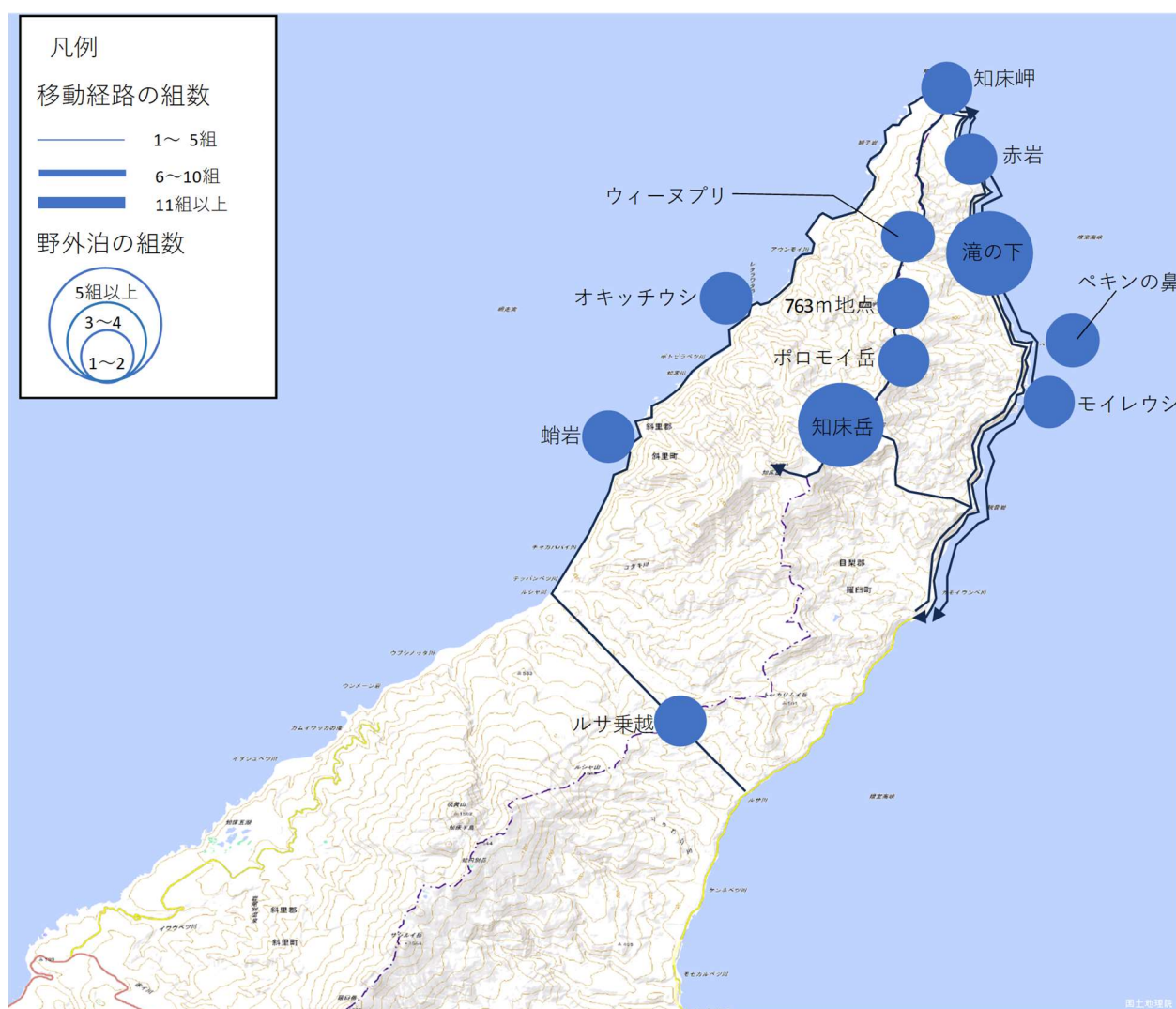


図 6. 先端部地区 トレッキングの移動経路及び宿泊地点

出典：電子地形図 25,000（国土地理院）を加工して作成

表 5. トレッキング利用者の移動経路及び宿泊地点

人数	滞在日数	場所							
		0泊	1泊	2泊	3泊	4泊	5泊	6泊	7泊
1	日帰り	観音岩							
1		カモイウンベ川							
1	2泊		知床沼	知床沼					
1			クズレハマ川	ベキンの鼻					
1			滝の下	滝の下					
2			知床沼	知床沼					
7	4泊		モイレウシ	滝の下	滝の下	モイレウシ			
3	5泊		滝の下	知床岬	ウィーヌブリ	知床沼	知床沼		
6			ルサ乗越	蛸岩	オキッチウシ川	不明	不明		
7	7泊		知床沼	知床沼	パロモイ岳	763m地点	ウィーヌブリ	赤岩	滝の下

② シーカヤック（図 7、表 6）

移動経路は 2 ルートで相泊から知床岬までの往復、相泊からウトロ東までの半島周回であった。行動予定は落合湾とペキンの鼻に集中していた。

今回の調査でウトロから相泊に向けて半島を周回した利用者はいなかった。

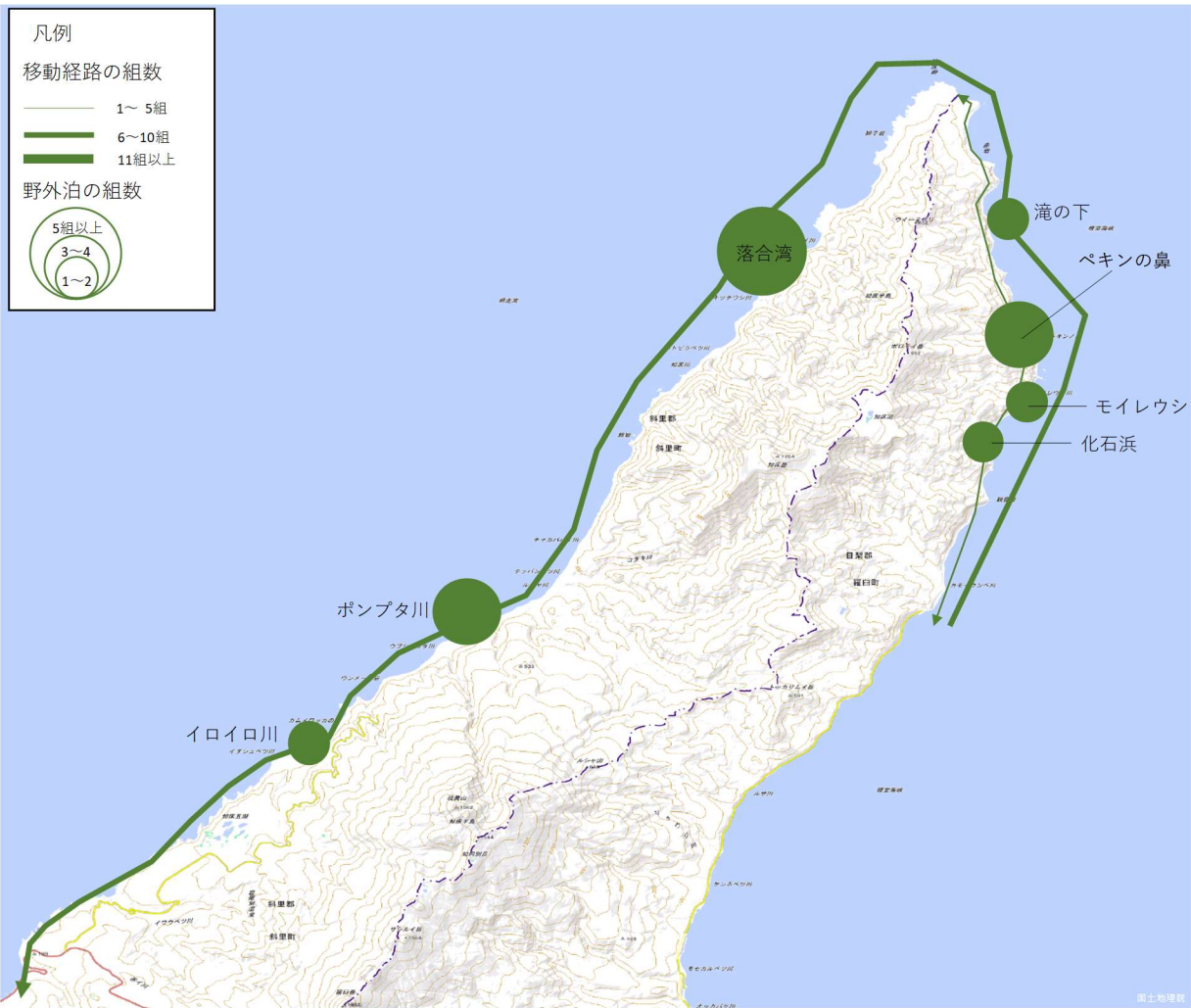


図 7. 先端部地区 シーカヤックの移動経路及び宿泊地点

出典：電子地形図 25,000（国土地理院）を加工して作成

表 6. シーカヤック利用者の移動経路及び宿泊地点

人数	滞在日数	場所				
		0泊	1泊	2泊	3泊	4泊
1	2泊		モイレウシ	二本滝		
1			落合湾	落合湾		
3	3泊		ペキンの鼻	落合湾	イロイロ川	
4			二本滝	落合湾	化石浜	
7			ペキンの鼻	落合湾	ポンプタ川	
14	4泊		ペキンの鼻	落合湾	落合湾	ポンプタ川
21			ペキンの鼻	ペキンの鼻	落合湾	ポンプタ川

釣り（図 8、表 7）

本利用者は、相泊から近場のカモイウンベ川またはクズレハマ川、ウナキベツ川へ行く予定であり、全員日帰りの利用であった。



図 8. 先端部地区 利用形態別の移動経路及び宿泊地点

出典：電子地形図 25,000（国土地理院）を加工して作成

表 7. 釣り利用者の移動経路及び宿泊地点

人数	滞在日数	場所
2		ウナキベツ川
29	日帰り	クズレハマ川
31		カモイウンベ川

1-3. その他実施事項

調査の実施にあたっては、「利用の心得」から逸脱した不適切な利用（不十分なヒグマ対策、たき火の実施や不始末、番屋への宿泊、釣魚の投棄等）が認められた場合に利用者へ指導を行った。また、利用者からヒグマの目撃があった場合、聞き取りを行い記録した。なお、難所の状況変化があった場合に聞き取りをすることとしていたが、そのような情報は得られなかった。

<利用者への指導>

本調査において、十分なヒグマ対策を取っていなかった3組に、ルサ FH でクマスプレーやフードコンテナがレンタルできることや、ヒグマの遭遇回避のための音出しなどの指導を行った。たき火の実施、ゴミの投棄、番屋への宿泊、釣魚の投棄等は確認されなかった。

<ヒグマ目撃情報>

本調査でヒグマ情報について3組から聞き取りを行った。これらの情報は、速やかにルサ FH 及び知床羅臼ビジターセンターへ提供した。

表 8. 入域調査中に利用者から聞き取りしたヒグマの目撃件数と頭数

No	日付	目撃箇所	目撃件数	目撃頭数
1	7月17日	赤岩から啓吉湾にかけて	-	20
2	7月20日	観音岩	1	1
3	7月21日	化石浜	1	1
計			-	22

＜入林簿の記載率（表 9）＞

本調査中に聞き取りをした利用者が相泊に設置された入林簿に記載している割合を確認し、7割の利用者が記載していなかった。特に「シーカヤック」と「釣り」の利用者は全員記入していない結果となった。

表 9. 調査対象者における入林簿記載割合

		あり	なし	合計
トレッキング	組	8	2	10
	%	80%	20%	100%
シーカヤック	組	0	7	7
	%	0%	100%	100%
釣り	組	0	34	34
	%	0%	100%	100%

2. 2020 年度から 2023 年度に実施した調査結果の取りまとめ

先端部利用者の動向を把握するため、同調査は 2011 年度から 10 年間にわたり船舶を利用し海岸トレッキングルート上で行われてきた。2020 年度には、トレッキングルート上での入域調査と出発地である相泊での入域調査を実施し、どちらの聞き取り組数が多いのか比較することで、調査手法の検討を行った。その結果、相泊で行った入域調査の方が短い期間で数多く聞き取りすることができた。そのため、2021 年度以降は、相泊のみで入域調査を実施している。

本章では、同様の調査手法で実施した過去 4 年分の入域調査の結果を整理し、利用状況の年推移の把握を行う。併せて、今後の適正な利用の推進と調査手法の効率化について検討を行った。

2-1. 分析の方法

2020 年度から 2023 年度までの 4 年間において聞き取りを行った 192 組を分析対象とした。各年の調査概要を表 10 に示す。

分析する項目は、①利用形態②ヒグマ対策の状況③ルサ FH への立ち寄りの有無、④利用の心得及びシレココの認知状況を中心に行うこととした。

表 10. 過年度の調査概要

調査実施年	調査期間	調査日数	聞き取り数(組)	調査項目	その他
2020 (令和2) 年	7月21日～7月25日	5日	27	グループ人数、年代、利用形態、目的地、行動予定、ヒグマ対策の状況、ルサフィールドハウスへの立ち寄りの有無、利用の心得及びシレココの認知状況 上記「目的地」を「移動経路」へ変更。それ以外の項目に変更なし。	利用者への指導、難所の状況変化（落石や崩落等）、ヒグマの出没状況
2021 (令和3) 年	7月22日～7月25日 8月7日～8月10日	8日	47		
2022 (令和4) 年	7月29日～7月31日 8月11日～8月14日	8日	67		
2023 (令和5) 年	7月20日～7月23日 8月10日～8月13日	8日	51		

2-2. 分析の結果

<利用形態（図 9）>

2020 年度を除き、2021 年度以降は「釣り」の利用者が過半数を占めた。一方、「トレッキング」と「シーカヤック」は年によるばらつきがあるが、明確な傾向は見いだせない。トレッキングは、4 カ年で 2020 年度が最も利用の割合が高かった。

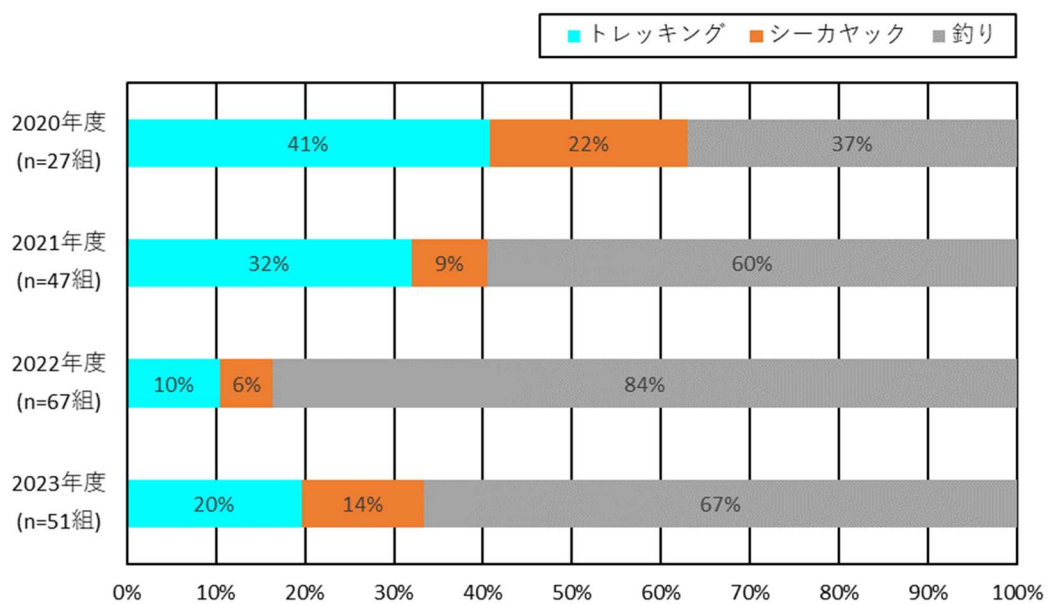


図 9. 利用形態の年推移（2020 年度から 2023 年度まで）

<ヒグマ対策の状況（図 10）>

ヒグマ対策を講じている利用者の割合は4ヵ年の平均で約7割となり、その割合も年々増加傾向であった。

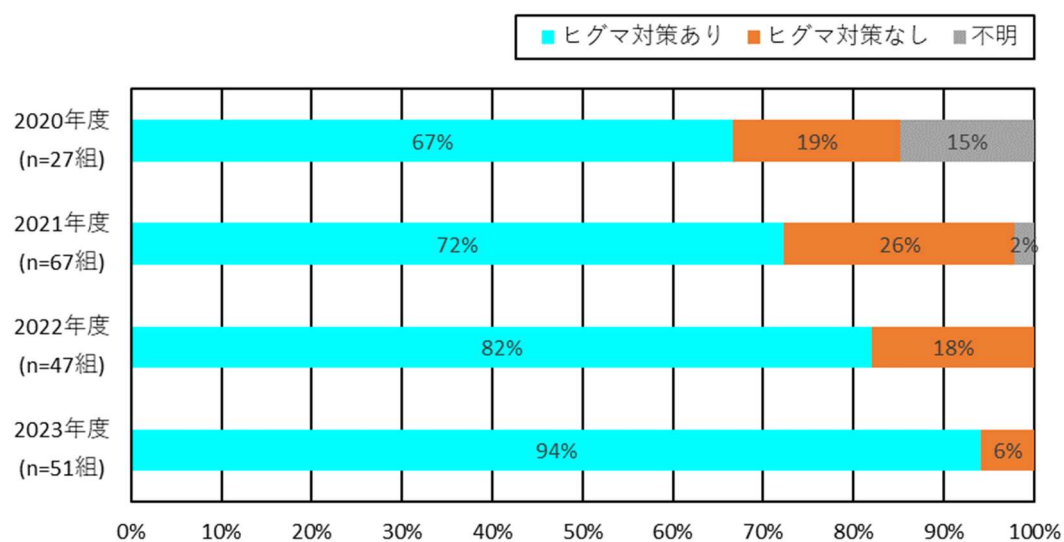


図 10. ヒグマ対策の実施状況（2020 年度から 2023 年度まで）

＜ルサ FH への立ち寄り状況＞

利用形態別の年推移を以下に示す。

① トレッキング（図 11）

4 ヶ年の平均で約 6 割弱がルサ FH に立ち寄っていた。ただし、2022 年度を除いた 3 ヶ年（2020 年度、2021 年度、2023 年度）の平均では約 4 割程度に減少した。2022 年度は全員が立ち寄ったことになっているが、レクチャーを受講していたのかまでは不明である。

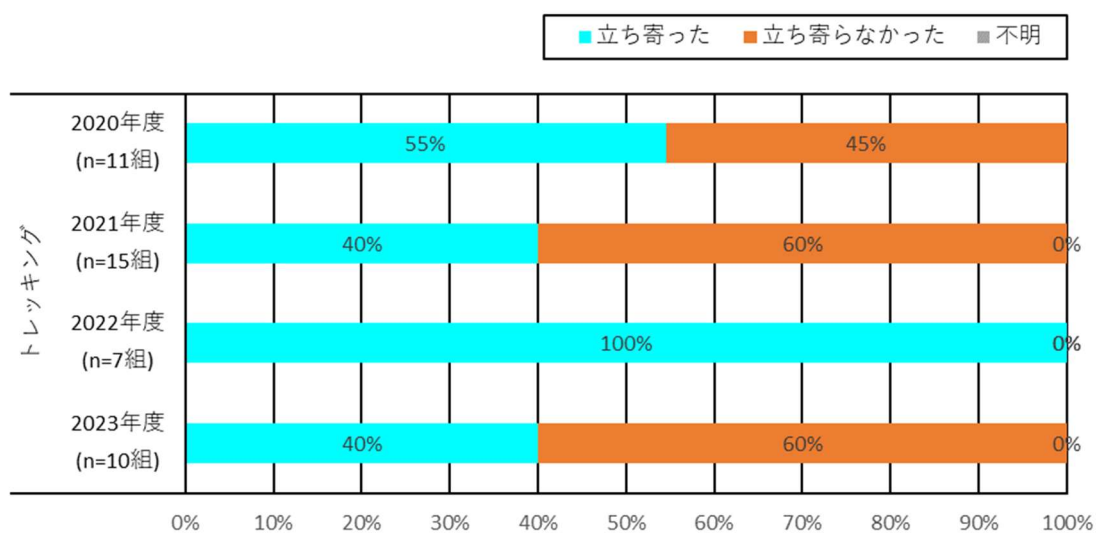


図 11. トレッキング利用者におけるルサ FH への立ち寄り状況（2020 年度から 2023 年度まで）

② シーカヤック（図 12）

4 ヶ年の平均では約 35%の利用者がルサ FH に立ち寄っていた。調査年によるばらつきもあり、最も多かった 2022 年と最も少ない 2021 年とでは 25 ポイントの差があった。2022 年度は 5 割の利用者が立ち寄っているが、レクチャーを受講していたのかまでは不明である。

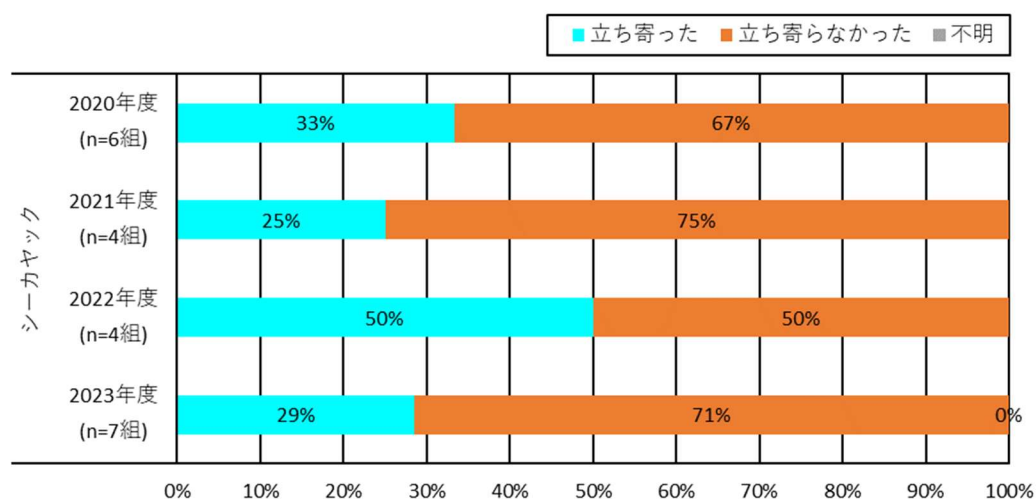


図 12. シーカヤック利用者におけるルサ FH への立ち寄り状況（2020 年度から 2023 年度まで）

③ 釣り（図 13）

4 ヶ年の平均で約 1 割しかルサ FH に立ち寄っておらず、2020 年度に関しては該当者なしであった。一方で、2022 年度は 3 割が立ち寄っているが、レクチャーを受講していたのかまでは不明である。

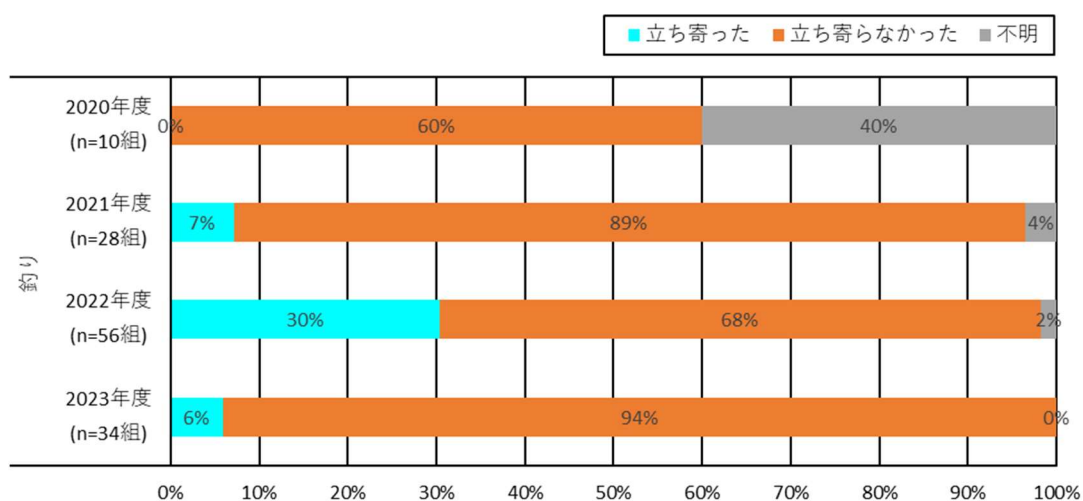


図 13. 釣り利用者におけるルサ FH への立ち寄り状況の（2020 年度から 2023 年度まで）

＜利用の心得及びシレココの認知状況＞

利用形態別の年推移を以下に示す。

① トレッキング（図 14）

4 ヶ年の平均で約 7 割の利用者が利用の心得及びシレココを認知していた。さらに 2022 年度は全員が認知しており、図 11 のルサ FH 立ち寄りとの関連性があると考えられる。一方、2021 年度の認知割合は低かった。

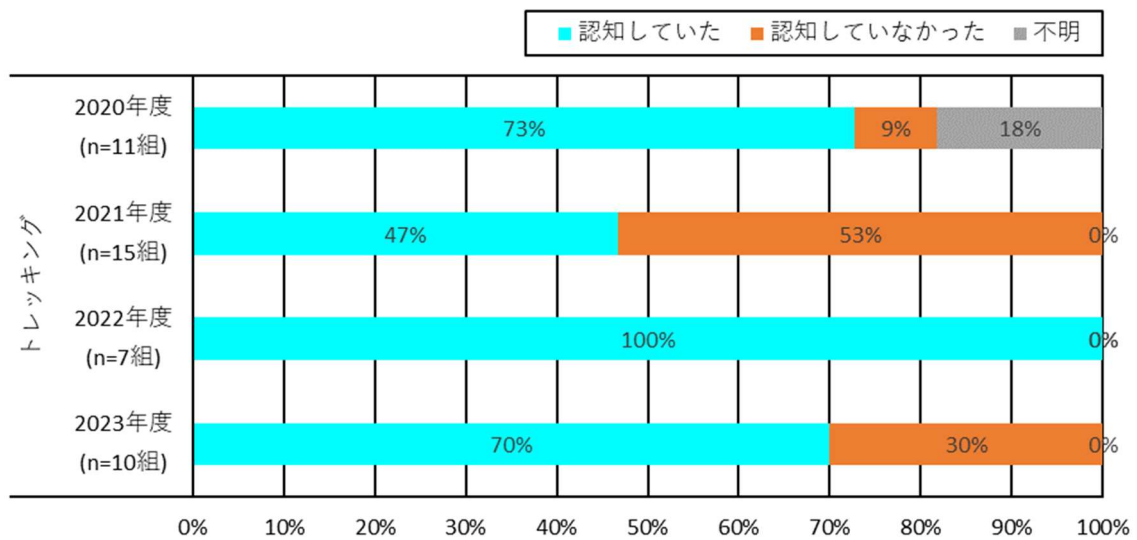


図 14. 利用の心得及びシレココの認知状況の結果【トレッキング】（2020 年度から 2023 年度まで）

② シーカヤック（図 15）

4 ヶ年の平均で約 8 割の利用者が利用の心得及びシレココを認知していた。さらに 2021 年度と 2023 年度に関しては全員が認知していたが、ルサ FH の立ち寄り（図 14）との関連性は低いと考えられる。一方、2022 年度は利用者の 5 割しか認知していなかったが、ルサ FH 立ち寄り（図 14）との関連性はあるように思えるが、情報量が不足している。

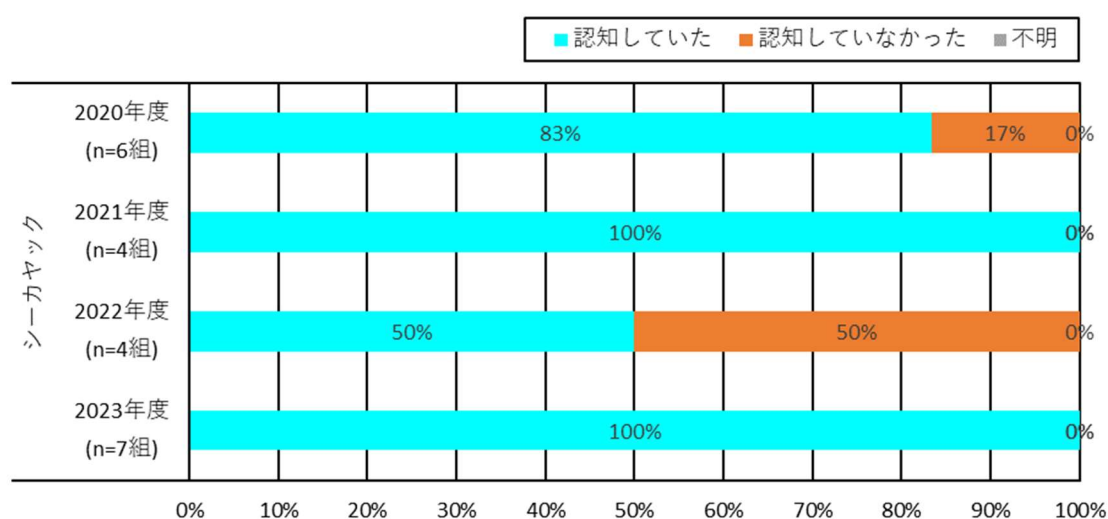


図 15. 利用の心得及びシレココの認知状況の結果【シーカヤック】（2020 年度から 2023 年度まで）

③ 釣り（図 16）

4 ヶ年の平均で約 1 割の利用者のみしか利用の心得及びシレココを認知しておらず、2020 年度に関しては該当者なしであった。認知していた割合が最も高い 2021 年度であっても 2 割といった結果であった。

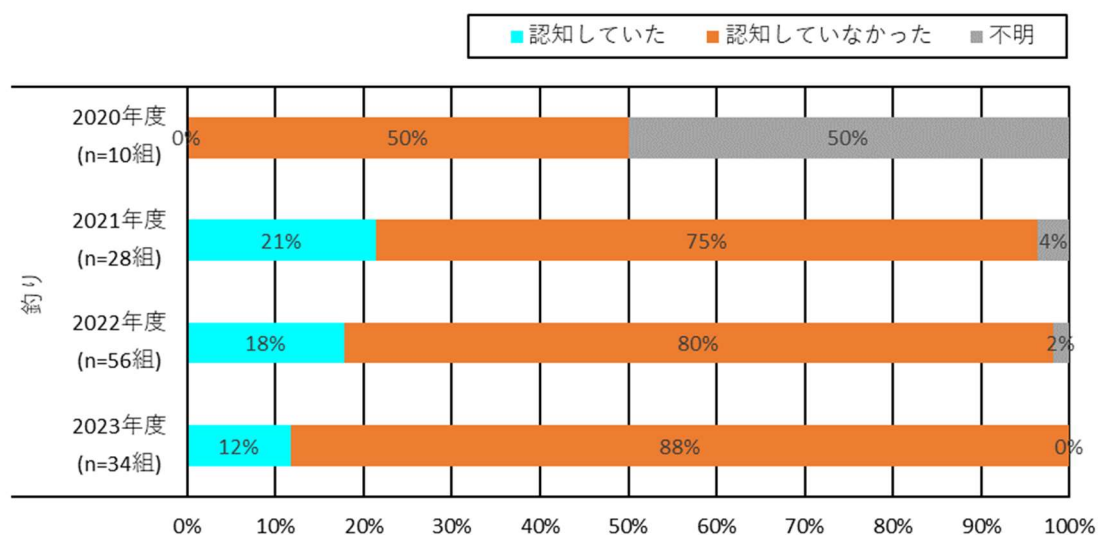


図 16. 利用の心得及びシレココの認知状況の結果【釣り】（2020 年度から 2023 年度まで）

3. まとめと考察

3-1. 2020 年度から 2023 年度までの入域調査に関する考察

今年度の調査結果と 2020 年度から 2022 年度の調査結果を含めた考察を行う。

全ての利用形態でヒグマ対策を実施していた

知床では高密度でヒグマが生息している。先端部地区に住居はなく、漁業者が季節限定で作業する番屋が点在するのみである。近年、先端部地区の番屋を畳む漁業者が現れ、よりヒグマなどの野生動物が出没しやすい環境になっている。実際、相泊港から出港している観光船事業者からのヒグマ目撃情報も増加している。特に今年度はいわゆるヒグマの大量出沒年に該当し、約 9 割の利用者がヒグマ対策を実施していた（表 4）。2020 年度から 2023 年度までの傾向を見ても、8 割弱の利用者がヒグマ対策を講じていた（図 10）。昨今のヒグマ出沒のことを考えると、今後も高い水準で維持されると推測する。

ルサ FH への立ち寄り

先端部地区を利用するうえでルサ FH の存在は欠かせないものであり、利用者が館内展示の鑑賞だけでなくレクチャーを受講することにより、リスク管理と自然環境への配慮にもつながる。しかし、ルサ FH に立ち寄る利用者は全体の 2 割程度に留まっている（図 4）。利用形態別においては、最も立ち寄る割合が多いのは「トレッキング」の利用者である。ただし、経年比較においてはばらつきもあり、特定の傾向は認められない。（図 11）。「シーカヤック」や「釣り」の利用者は全体として立ち寄り率が低い（図 12、図 13）。こうした利用者に対しては、立ち寄らなかった理由を聞き取ることも重要である。また、ルサ FH に立ち寄った際にレクチャーを受講したかどうかも重要な要素である。今年度からは、レクチャー受講の有無についても聞き取りしており、次年度以降も継続的にデータ収集することで、今後のルサ FH のあり方を検討できる材料になると考える。

利用の心得及びシレココの認知度の差

先端部地区の情報を発信するうえで利用の心得と Web サイトのシレココは重要な位置づけであり、旅行の計画段階で確認されることが望ましい。「トレッキング」「シーカヤック」の利用者は全体として認知度が高い傾向がある（図 5、図 14、図 15）。これらの利用形態は携帯電話が不通の場所で長期の野営を伴うものであり、事前準備やリスク回避のた

めに、自ずと利用の心得やシレココの情報にたどり着くと考えられる。一方、「釣り」の利用者の認知度は極めて低い。日帰り利用が中心であり、移動距離も短いため、他の利用形態とは異なるものとして捉える必要がある。(図 5、図 16)。そもそも利用の心得に記載されているサケ・マスなどの釣り利用は、海釣りや渡船での特定場所での利用を想定しており、実態との乖離も見受けられる。また、釣り行為そのものについては、別途さまざまな既存のルールが存在しており、強制・任意を含め複数のルールが並列している状況である。

今後は、釣りを主目的とする利用者の数や行動、属性等について把握・分類し、それぞれにとって望ましい、必要なルールの普及方法等を検討する必要がある。

3-2. 来年度の調査のあり方

現行の調査手法での実施は今年度で 4 年目となる。本項では、次年度以降の調査手法のあり方について考察する。調査地点は同様に相泊とすることが適当である。相泊での入域調査の利点は、①各利用形態の出発地、帰着地になっている ②利用者のいる時間帯を狙って長時間の調査ができる ③調査中は車両で待機しているため、雨天でも実施することができるなどである。

調査時期は、大潮の時期に調査日を設定することで、海岸トレッキング利用者の動向を把握することができる。シーカヤックについても比較的海上が穏やかになる 7 月から 8 月にかけて調査を実施することが望ましい。

調査項目は、昨年度に利用形態の多様化を踏まえた見直しが必要であると提案し、今年度は「利用形態」とは別項目で「移動手段」を新たに追加した。これは、利用形態と想定する移動手段とが一致しない例があるためであり、利用形態の多様化を把握するためにも継続することが望ましい。巻末資料に今年度の調査票を添付する。

卷末資料 1. 2023(令和 5)年度 知床半島先端部地区利用状況調査 調査表

2023(R5)年度 環境省事業 知床半島先端部地区利用状況調査業務 調査表 整理No.

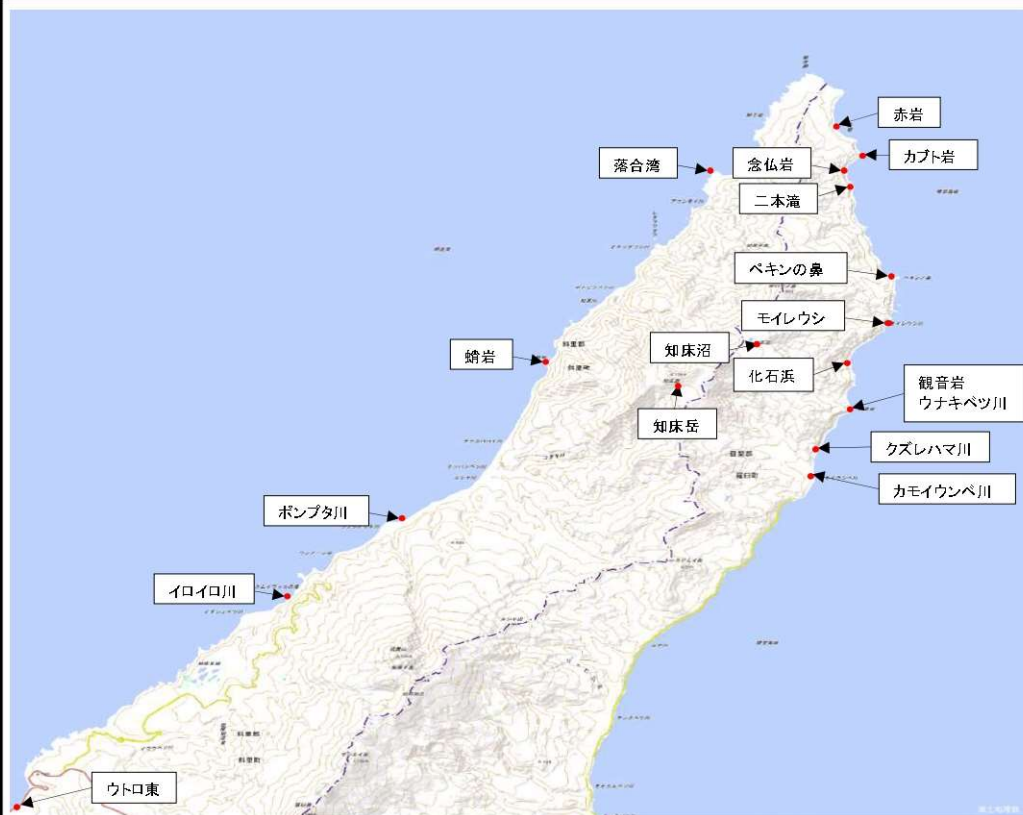
日時：2023年 月 日【 】 天気：晴・曇り・雨

場所：相泊

調査員：【 】

★レクチャー受講者証No.			ヒアリング・目視
1-1	利用形態	トレッキング・シーカヤック・釣り・その他（ ）	
1-2	移動手段	シーカヤック・エンジン付きゴムボート・SUP・その他（ ）・不明	
2	ヒグマ対策の状況	有【スプレー・フードコンテナ・くまずす・笛・その他（ ）】 無・不明	
3-1	ルサFHへの立ち寄り	有・無・不明 【無の場合、理由を聞き取り(以下に記入)】	
3-2	ルサFH立寄り有りの場合	レクチャーを受講している。【はい・いいえ 【“いいえ”の場合、理由を聞き取り(以下に記入)】	
4	利用の心得・シレコ	知っている・知らない・不明	
5	グループ構成人数	人（男： ）人（女： ）人	
6	★年齢層	10代（ ）人・20代（ ）人・30代（ ）人・40代（ ）人・50代（ ）人 60代（ ）人・70代（ ）人・その他（ ）人・不明	
7	居住地	北海道・東北・関東・中部・北陸・近畿・中国・四国・九州・沖縄 国内不明・アジア・ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニア・海外不明・国内外不明	
8	所属	個人・ガイドツアー・大学ワンゲル・社会人山岳会・マスコミ・その他	
9	自由欄	服装(色): 身長: 相泊までの移動手段: 車・バイク・自転車・徒歩・その他（ ） ザックのカラー: 入林簿の記載: 有・無 ※聞き取り調査後に入林簿の記載を確認すること 有の場合、詳細を記載 _____ 計画書の提出先: 入林箱・警察・海保・ルサFH・羅臼VC・車内 利用者指導: _____ 不適切な利用(たき火・ゴミの投棄・番屋への宿泊・釣り魚の投棄など) _____ 難所の状況変化(落石や崩落等)帰着時に確認 _____ ヒグマの情報(裏面に記載でもよい)帰着時に確認 _____	
		灰色部分は必ず聞き取りしてください。相手に余裕があれば、灰色以外の項目も聞き取りしてください。	
★		レクチャー受講者証を所持している方は、★部分のみ聞き取りをする。未記入箇所は、先端部レクチャー記録のNo.と照らし合わせをし、追記する。	

裏面に”10【移動経路、行動予定】”の記入欄あり！



泊 日 予備日 あり (日間) ・ なし

日帰り

1泊目

2泊目

3泊目

4泊目

5泊目

6泊目

7泊目

卷末資料 2. 2023(令和 5)年度 知床半島先端部地区利用状況調査 結果一覧

No.	日付	パーティ数 (人)	年代	利用形態	ヒグマ対策の状況 (組数)		ヒグマ対策を実施した利用者の装備品 (組数)												ルサフィールドハウスの 立寄り状況(組数)		レクチャーの受講		利用の心得・シレココの 認知状況(組数)		
					有	無	クマスプレー	フードコンテナ	くますず	笛	爆竹	斧	火薬ピストル	棒	轟音玉	獣除け線香	ロケット花火	ナイフ	有	無	有	無	知っている	知らない	不明
1	7/20	14	20代、60代、70代、不明	シーカヤック	○		○													○			○		
2	7/20	1	70代	釣り	○				○											○				○	
3	7/21	1	70代	釣り	○				○											○				○	
4	7/22	2	30代	釣り	○		○		○											○				○	
5	7/22	1	30代	トレッキング	○				○											○			○		
6	7/22	4	10代、40代、50代	シーカヤック	○		○													○			○		
7	7/22	1	10代	トレッキング	○		○	○	○										○	○			○		
8	7/22	1	40代	シーカヤック	○		○				○								○	○			○		
9	7/22	1	20代	釣り	○		○		○											○				○	
10	7/23	1	40代	トレッキング	○				○		○									○				○	
11	8/10	2	20代、30代	釣り	○		○		○										○			○		○	
12	8/10	1	60代	釣り	○				○											○			○		
13	8/10	4	40代、50代、	釣り	○				○											○				○	
14	8/11	1	30代	シーカヤック	○		○	○											○	○			○		
15	8/11	2	60代	釣り	○		○			○				○						○				○	
16	8/11	2	20代	トレッキング	○		○					○	○						○	○			○		
17	8/11	7	40代、50代、	シーカヤック	○		○								○	○				○			○		
18	8/11	2	20代	釣り	○				○											○				○	
19	8/11	1	50代	釣り	○												○			○				○	
20	8/11	2	20代	釣り	○		○		○											○				○	
21	8/11	2	20代、60代	釣り	○		○		○											○				○	
22	8/11	2	30代、40代	釣り	○				○										○		○				
23	8/11	1	50代	釣り	○				○									○		○				○	
24	8/11	2	50代、60代	釣り	○				○											○				○	
25	8/11	21	10代、30代、40代、50代、60代、70代	シーカヤック	○		○													○			○		
26	8/11	7	10代	トレッキング	○		○												○	○			○		
27	8/12	3	40代、50代、60代	釣り	○				○											○				○	
28	8/12	1	40代	釣り	○				○											○				○	
29	8/12	3	50代	シーカヤック	○		○		○											○				○	
30	8/12	1	20代	釣り	○				○											○				○	
31	8/12	3	20代、40代	トレッキング	○		○		○											○				○	
32	8/12	2	20代	釣り	○		○		○											○				○	
33	8/12	1	50代	釣り	○				○											○				○	
34	8/12	1	40代	トレッキング	○		○	○	○								○			○			○		
35	8/12	2	20代、30代	釣り		○														○				○	
36	8/12	2	40代、50代	釣り	○		○		○											○				○	
37	8/12	2	50代、60代	釣り	○		○		○	○										○				○	
38	8/12	6	40代、50代	トレッキング	○		○			○									○	○				○	
39	8/13	1	30代	釣り	○		○		○											○				○	
40	8/13	1	50代	釣り	○		○		○	○										○				○	
41	8/13	4	50代	釣り	○		○		○	○										○				○	
42	8/13	7	10代、30代、40代、50代	トレッキング	○		○		○	○			○							○				○	
43	8/13	2	50代	釣り	○		○		○	○	○									○				○	
44	8/13	2	40代、50代	釣り	○		○		○	○			○							○				○	
45	8/13	1	20代	釣り	○				○											○				○	
46	8/13	1	50代	釣り	○													○		○				○	
47	8/13	1	40代	釣り	○		○		○									○		○				○	
48	8/13	2	20代、50代	釣り	○		○		○											○				○	
49	8/13	1	50代	トレッキング		○														○				○	
50	8/13	6	60代	釣り		○														○				○	
51	8/13	1	50代	釣り	○				○											○				○	
143					48	3	30	3	36	8	3	1	3	1	1	2	1	4	8	43	6	2	18	33	

令和5年度 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所 請負事業

事業名:令和5年度 知床半島先端部地区利用状況調査

事業期間:令和5(2023)年4月3日～令和5(2023)年12月15日

事業実施者:公益財団法人 知床財団

〒099-4356

北海道斜里郡斜里町大字遠音別村字岩宇別 531 番地



リサイクル適正の表示:紙へリサイクル可

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料(A ランク)のみを用いて作製しています。